



下寺町界隈の天王寺七坂のひとつ口繩坂  
織田作之助が「木の都」で描いた情景や風景が今も残っています  
(本文中に関連記事があります)

## 目次 contents

### 大阪特集～小さな大阪の元気を七感で特集しました

#### ・大阪の街を七感で楽しむ

予感する	2
観る	4
嗅ぐ	6
聴く	8
味わう	10
触れる	12
魂で結ぶ	14

#### ・道頓堀があつい

社会人大学院の創設は、都市再生の 決定打となりうるか	17
-------------------------------	----

・青垣町で魅力的なスローライフの実践	18
・我が家が太陽光発電所になりました	19
・まちかど	20

大阪人はアイデアマンといわれている。次々にいろいろな事を考えて実行していく。失敗しても、方向転換をしながら休みなく動き回っている。まさしく間寛平の「わしゃ、止まったら死ぬんじゃー」を大阪エリア全体で叫んでいるような気さ



えしてくる。関西経済がおちこんでいると言われて久しいが、決して止まっているわけではない。ひとつひとつは小さな動きではあるが、多様化するニーズに対応する取り組みがあちらこちらで始まっている。(鮎子田 稔理)

### ■ヒトとペットのこちよ関係

最近、大阪で注目度の高いエリアに、靑公園の周辺、いわゆる京町堀地区をあげることができます。もともとデザイン会社や設計事務所が多く集積するエリアですが、近年は新しいマンションが次々と建ち、夜間人口も増えています。

公園の一つ北の通りを歩くと、以前は小汚い雑居ビルだったところが、ちょっと見ないうちに洒落たカフェバーになっていることに気づきます。今がまさに旬のエリアなのだなあと思わずにはいられません。

ところで、このエリアで特筆すべきことは、きれいなカフェやレストランが多いというほかに、もう一つ、ペットを連れて入ることができる「ドッグカフェ」の多いことがあげられます。

ペット連れのお客さんは大歓迎といい、自らも店内に犬2匹を飼っているカフェ店主のオーノさんによると、近辺のドッグカフェ&レストランの数は優に10件を越えるとのこと。社員の多い朝や昼はペットお断りだけれども、夕方以降や休日はドッグカフェになるという、都合のいい店もあるそうです。

「京町堀のコミュニティスペース」を自認す



カピカさいビルの1階に洒落たバーができた

るオーノさんの店には、夕方から犬連れの客がぱらぱらとやってきては、犬を抱きながら珈琲やビールを飲んでくつろぎます。客の7割がペット連れといえ、その多さが伝わるでしょう。「犬が散歩してくつろいだ後は、人間がくつろぐ番なのよ」と語ってくれた女性は、犬2匹と散歩の途中でした。中には40分かけて歩いてくる方もいるのだとか。郊外のドッグカフェは車で来店する客が多いけど、靑公園周辺の店は、散歩のついでという人の多いことが特徴です。

どうやら、「犬のために散歩する」から「犬と一緒に散歩する」へという、飼い主の意識の変化があるようです。家の外でも犬と一緒に余暇を楽しみたいと思う人が増えていることから、ドッグカフェがますます流行りそうです。まだまだ嫌われることも多いペットですが、ペット歓迎の店が増えていく中で、その意識も変わりつつあるようです。(長澤 弘樹)

### ■元気のみなもとは一大阪人のこてこてパワー ～福島聖天通商店街のとりくみ紹介～

若い女性のあとには男性が…

商店街活性化のアイデアが「売れても売れても占いデー」とは…こてこての大阪節です。でも、アイデアは悪くありません。なんたって、女性は「占い」に弱い。たぶん、女性がくれば、男性もきます。そうすれば、人が集まって、元気になります。そんな気になるスポットが、大阪福島区の商店街にあります。

#### 「売れても占い商店街」

大阪市福島区聖天通商店街では、毎月第四金曜日に、20～30人の占い師が路上に机を並べます。その占い師目当てに、若い女性が長い列

をつくります。占い見料は1000円ほど。もちろん、占いと同時に、商店街の飲食店が流行ることは言うまでもありません。

このアイデアを出したのは、地元の商店振興組合。商店街活性化の1アイデアが見事に世間の“ツボ”にはまりました。

「占い」で人をよぶため、商店街全体でCI計画を練り、看板、のぼり、キャラクターの作成など商店街全体でのイメージ戦略に加え、当たりくじ付き開運たこ焼き、ラッキーカラーの開運ネクタイなど、占いをテーマにしたグッズが各店舗に登場しています。マスコミで放映された日には、推定1万6千人の人が訪れているそうです。

### まちも変わってきた

商店街での取り組みに加え、ホテルプラザの閉鎖にともない、そこで働いていたシェフたちによるオシャレなお店がこの福島にオープンしはじめています。隣接する西梅田の再開発によるまちのイメージの改善と梅田への足回りの良さから、住人は増えているとのこと。下町風情のよさを残しながら、今、福島は若者のひそかなブームになりつつあります。

### まちのこれから—「人」が資源

この元気をどう維持するか。福島聖天通商店街では、次々と新しいアイデアを企画しています。特命館とよばれる空き店舗を活用した「占い大楽」、ホームページでの発信など、ゆくゆくは日本全国の占い師による大占い大会、修学旅行の観光バス立ち寄りも目指しているそうです。

やっぱり、最後は「人」です。やる気と熱意、それといろんな人が集まってアイデアを出し合

うこと、そうすればにぎわいはつくり出せます。

お話をお聞きした居酒屋八万のおかみさんは、「日本一の商店街にしたい」と熱く夢を語っていました。(吉田 久視子)

### ■文化創造の場～小劇場の行方～

昨年から今年にかけて、「スペースゼロ」(2002年4月閉館)や「扇町ミュージアムスクエア」(2003年3月閉館)など、大阪を代表する小劇場が相次いで閉鎖されました。また、メジャーな劇団の大阪公演でも有名な近鉄劇場・近鉄小劇場も、来年(2004年)1月には、閉館することが決まっています。

映画や演劇、コンサートなどエンターテインメントに身近に親しめることは、都心に住む魅力の一つです。その魅力が大阪から消えていってしまうことは、ひいては、都心居住の場としての吸引力を弱めることにつながります。劇場というとすぐに立派なホールを連想しますが、いま求められているのは、維持管理のかかる大きな「ハコモノ」ではなく、小さな文化を育む「舞台」であり、活動を通じた「にぎわい」です。

そこで、昨今、注目されるスポットは、上町台地に集積する寺町界隈です。お寺が舞台の場を提供しているのですが、「一心寺シアター倶楽」や「應典院」は、単なる場所貸しではなく、そこで市民を中心とする文化活動を支援し、文化コミュニティを育てています。一方で、大阪市も小さな文化活動の支援に力を入れ始めました。通天閣そばにある「フェスティバルゲート」内の空きスペースを活用して「Art Theater dB」を整備したり、なんばでは、閉校した旧精華小学校を再利用し、舞台芸術の場として蘇らせる方向です。大阪の一大繁華街「ミナミ」で、このような場が生まれてくることは、周辺地域の活性化にもつながり、その波及効果が今後大いに期待されます。(高田 剛司)



八万の女将さん(中央)、福島で設計事務所を主宰する田代さん(右)と

大阪のまちは、東京規模とはいわないまでも、続々と新しいスポットが登場している。JR大阪駅前周辺だけでなくナンバの開発も目覚ましいものがあり、ショッピングなどで足を運ぶには、ターゲットを絞らなければならないほどだ。また、かつて問屋街として賑わった船場や堀江も若者が集う空間として再び活性化している。このまちの魅力は、新しいものだけではない。まち



のそこそこを散策していると戦災に遭ったにも関わらず、古代の都や太閤さんの時代から蓄積された歴史と文化に彩られた地域の誇りを観ることができるのだ。もちろんそういう「大阪らしさ」を感じる背景には大阪を大切にしている人の思いがあるのだけれど。財政難なんて吹き飛ばす、未知数の可能性とパワーを秘めているそんな大阪が大好きだ。(中村 孝子)

### ■法善寺横丁の復興を観て想う

法善寺横丁が2度の火災を被り、現在、完全復興に向けて着々と再建が進んでいます。

法善寺横丁の魅力は、なんとといっても、細い路地を挟んで肩を寄せ合い建っている魅力的な飲食店が醸し出す情緒ある雰囲気です。その雰囲気があるからこそ、夫婦善哉、月の法善寺横丁などの小説や歌謡の題材ともなり、多くの文化人にも愛されるまちになったといえます。

横丁の復興にあたっては、ご存じのように、その路地空間の雰囲気を残すため、「連担建築物設計制度」が適用され、建物の防火基準を満たした上で2.7mの通路として路地的空間を確保することができました。

それまでの経過で、盛んに議論されたのは、全国一律の建築基準法という壁をどう乗り越えて横丁の雰囲気を守るのか、ということでした。

都市には、独自の文化が育ち、その歴史が積み重なることでまちの個性が生まれます。求められるのはその個性を維持し、育てることではないでしょうか。

日本の都市には個性がないとよく言われますが、それぞれの都市の持つ個性を大切に、多様性のある都市空間を作り出すことが必要です。その点、法善寺横丁はその価値が広く認められ、「大阪の顔」としてまちの個性を残すことができました。

近年、都市観光が注目されている中で、各都市はもっと個性をアピールできるよう、その土地で育った感性を存分に発揮したまちづくりを進めてほしいと思います。

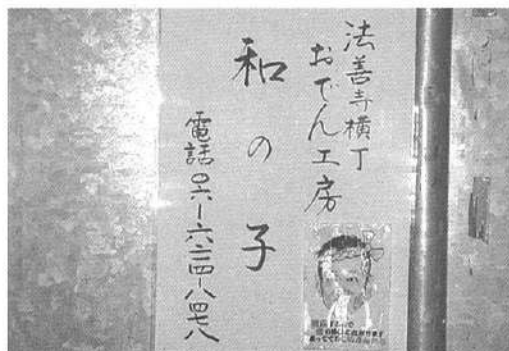
そして、もう一つ大切なことは、「人」です。法善寺横丁では、被災をきっかけとして、横丁全体の結束力が強まったと聞きます。復興に向けた中では、支援者の協力で様々なイベントも催されました。

被災をきっかけとして、横丁に対する愛着や誇りも高まり、また横丁を愛する人々も、その価値を再認識したことでしょう。法善寺横丁は、まちの刻んできた歴史を守る中で、新しく生まれ変わったのかもしれない。

(嶋崎 雅嘉)



2度の火災を経て、着々と再建が進む法善寺横丁



開店するまで待ってね お店の貼り紙

### ■都会の森の誕生～なんばパークス

大地にどっしりと根を下ろし鬱蒼と生い茂る樹木、ずっと続く緑のトンネル、木々の切れ間から見える青空とやわらかい光。以前、都内で遭遇した森の記憶です。一冊の本に出会うまで、かつてこの周辺は森林だと思いこんでいました。森は、明治神宮で明治天皇崩御後、100年後を想定した遠大な植栽計画のもと、全国から寄せられた献木、寄付金、工事に携わる人と優秀な技術者により草地に造られたものでした。

さて、最近、ナンバが元気です。昨年できた「なんばHach」がミナミの新しいランドマークとして定着しつつありますが、その横にひときわ目立つ建物が完成しつつあります。元大阪球場跡地に建設中の複合緑化都市「なんばパークス」(開発：南海電車、高島屋)です。

パークスは、地上30階のオフィス棟「パークスタワー」と「自然と都市の二つの楽しみを同時に体験できるBig Park City」を基本コンセプトとした9階建ての商業棟で構成されています。歩道や阪神高速を走っていて、この商業棟の2階から9階までくねくねと段丘状にそびえる屋上公園「パークスガーデン」が視界に入るとびっくりします。約1万㎡の敷地には、235種、約4万株もの緑で包まれ10月7日オープンまで秒読み段階です。

近年、都心のヒートアイランド化は深刻な問題となっています。それを緩和する方法とし

て、東京都では、2001年から大型施設の建設に屋上緑化を義務づけています。もちろんこの問題は、大阪でも同様であり、パークスもこの問題に配慮し設計されています。

パークスの特徴は外観だけではありません。特筆に値するのが、9階の一部に設けられる都市型貸し菜園「アーバンファーム」(管理サービス付)です。貸し菜園は27区画分あり、1区画(2～3坪)で月額3000円で貸し出されます。水やりなどのサービスの他に、ここでは栽培方法の説明や貸し道具、ロッカーもあり、またガーデニング教室も開催されるそうです。さらに収穫した野菜の販売コーナーまで設けられるというのには、ますます驚かされます。都心での人工的な自然が本当に緑に優しいかという議論はさておき、このような屋上緑化を利用して民間企業が一般の人に貸し菜園をするのは全国で初めての試みとのことでした。

この大都市に創られた二つの森の誕生には、現在のように深刻な環境問題を抱えている時代背景、目的、計画の規模や方法は異なるかもしれませんが、人と緑の関わり深さや緑への思いがベースになっていることは、一緒だと思います。明治神宮のように100年後とはいわないまでも、近い将来、ナンバにも本物らしい森が誕生し、森林浴でほっこりできる空間で賑わう日は近いでしょう。

(中村 孝子)



段丘状にそびえる屋上公園  
一階には関西では最大規模のウイメンズ難波がある



隣接するビルから見下ろした「なんばパークス」  
これからこんもりした緑で覆われるだろう

ひとくちに「嗅ぐ」といっても、食べ物、自然、風土など、イメージネーションはどんどん広がっていくが、嗅覚は、ともすれば日常生活で研ぎ澄まされることが無くなった五感である。それ故、臭いの印象が残るのは、発せられるエネルギーが強烈であることの裏返しであると言え



る。さて、大阪に関して鼻を向けると「香り・臭い」を連続と受け継ぎ発信しているエリアがまさしくその地域を強烈にアピールしアイデンティティを確立していると言っても過言では無からう。さあ、皆さんを大阪の元気の香りと臭いの源へ誘おう。(中川 天開)

## ■コリアと日本の共生のまち

### 鶴橋駅周辺～コリアタウン

夕暮れどきに鶴橋駅で電車を降りると、かすかな煙とともに、焼肉の芳しい匂いが駅構内に既に漂っています。駅をでると、焼肉だけでなく、キムチやその他の香辛料、鉄板の焼ける匂い(何故か懐かしい)などが入り混じっていることに気づきます。

ワールドカップを契機とした日韓交流ムードの高まりや韓国料理の人気上昇の中、いまコリア文化がパワー全開であり、そのメッカとなるのがJR鶴橋駅界隈です。焼肉屋だけではなく、韓国食材や生鮮食品・衣料品を扱う店がひしめきあっています。その数700とも800ともいわれています。戦後の闇市からスタートしたというだけあって、路地が縦横に走り、薄暗いのに何故か活気があるという不思議な空間です。わずか1m程の路地巾にある店にも常連さんが今夜のおかずを買い求めるために並び、某TV番組で紹介された食材を扱う店では、遠方からやって来た人でごったがえしています。

広大な商店街はいくつかの商店街に分かれて

います。丸小橋商店街では、休憩所「ふれあい広場」を設け、車椅子でも使えるトイレやおむつ交換シートも設置され、その場から丸小橋商店街のホームページをみるできるようになっています。携帯電話からもアクセス可能で、広いエリアから目的のものを速やかに見つけることができます。もちろんマップを見ずに、自分の目で品定めしながら歩く楽しみを選ぶ人も多いことでしょう。

その鶴橋駅周辺から桃谷方面へ徒歩15分程歩くと御幸通商店街—通称コリアタウン—があります。ここは、駅周辺とは成り立ちも趣きも異なり、道幅も広く、アーケードがない分明るい雰囲気です。大正の末期から昭和の初期にかけて朝鮮半島の漁村や農村から大阪へやってきた人々が、同郷人のための食材などを売っていたところから始まった商店街です。現在この地に住まう在日コリアは二世、三世、そして、五世の時代に入っています。商店街の人や若い人達の中では日本・コリアの共生の中で、在日コリア文化を残し、活性化しようとイベントや情報発信に取り組んでいます。(鮎子田 稔理)



天下大將軍・地下女將軍の案内板  
韓国への電話のかけ方が書かれている



キムチ・にんにくの醤油漬けなどが並ぶ店先  
左上の洗面器は昔どの店にもあったつり銭入れ

■くすりの香りと近代建築の香り道修町（どしょうまち）界限

薬会社が立ち並ぶオフィス街のど真ん中に、張り子の虎の看板と、ブロンズの虎があらわれ、ビルの間を石畳が奥へと続く。薄暗い石畳の先にはクスノキと鳥居と社が・・・。

何とも奇妙な空間に神農さんの愛称で親しまれる少彦名神社はあります。

少彦名神社は安永9年(1780)に薬種仲買仲間て組織する伊勢講が、京都五條天神社より分霊を祀り、神農氏とともに合祀したのが始まりとされており、日本の薬祖神である少彦名命すくなひこなのみことと古代中国の統治者で特に医薬を司った神農氏しんのうが祀られ、薬の神、健康増進の神として信仰をあつめています。

道修町は、豊臣秀吉が大坂城の城下を作った頃、船場の一郭に形成されはじめたとされ、道修町に残る一番古い明暦4年(1658)の似せ薬取り締まりについての文章には、すでに33軒の薬種屋の署名捺印が残っています。

これら道修町の歴史は、少彦名神社に併設される道修町資料館にいけば全てわかります。

資料館に一步はいると、展示されている丸薬製造マシンからただよう懐かしい丸薬(正露丸?)の臭いが出迎えてくれます。

入館無料。少彦名神社の由来や道修町で培わ



ブロンズ虎と張り子の虎の看板が出迎える少彦名神社



近代建築と薬商家の共存

れてきた薬種流通のしくみなど道修町の歴史をパネル、ビデオ、古文書などから詳しく学ぶことができ、道修町資料保存会発行による古文書解説ペーパーや展示パネル集冊子なども入手できるほか、マイクロフィルム撮影されている江戸時代の文章や近代道修町文書の閲覧といったアーカイブズ機能も充実しています。

また、道修町界限には、近代建築が多く残っており、薬種商から起業し、現在はbondで有名なコニシ(株)(旧小西儀助商店：国重要文化財)、従前のデザインイメージを壊すことなく巧みにリニューアルした小川香料(株)大阪支店、まさしくレトロな生駒ビルディングや大阪ガスビルなど、地域の歴史を近代建築から直接感じとることができます。

道修町を誇りに思いその歴史を力強く継承していく地域の心意気あきんどだましい・商人魂と連綿と受け継がれてきた地域の足跡を近代建築群から感じとることができる・・・そんな道修町界限でした。

(中川 天開)



風格と威厳を感じる生駒ビルディングファサード

まちは固有の音環境がある。それはまちを行き交う人々の雑踏であり、通りを駆け抜けていく車のエンジンの音であり、路上のパフォーマーが奏でる音楽である。音は感覚に直接作用する最もプリミティブな刺激の一つである。それが心に響く



音楽であれば人々の行動にも少なからぬ影響を与える。まちに質の高い音環境が実現することによって人々の感性は研ぎ澄まされ、まちは確実にエネルギーを蓄える。まちに魅力的な音環境をつくりだす試みが各地で始まっている。(坂井 信行)

### ■大阪発、世界レベルのジャズ～澤野工房

澤野工房というジャズレーベルをご存じでしょうか。澤野工房はディープな大阪の代表、新世界で下駄屋を営む澤野由明氏が起こしたレーベルです。澤野工房のCDを発売する澤野商会は澤野はきもの店の一角にあります。

澤野工房からリリースされるCDは日本ではほとんど知られていないアーティストの作品が中心ですが、全て澤野氏の耳にかなった良質なジャズです。これまで各種のメディアにも取り上げられ「澤野工房のCDにハズレはない」という評判を得ています。

メジャーになっても澤野氏は新世界にこだわり続けています。「新世界のよさは気を使わなくてもいいこと。」気を使わなくてもいい環境が「聴く人に気を使わせない音楽を届けたい」という思いにつながるのでしょうか。

「新世界のイメージは決してプラスではなかった」そうですが「ある時それがプラスに働きはじめた」といいます。そうしたことから「将来は新世界から大阪のまちに音楽を発信していきたい」と澤野氏の思いは広がるのです。(坂井 信行)



看板と店の品揃えが激しく違う澤野工房

### ■ジャズが似合うまち～ひがし京橋商店街

京阪京橋駅の東側、京阪電車の高架下に伸びるひがし京橋商店街では、毎週木曜の夜に商店街主催の無料ジャズライブが開かれ評判になっています。ここではプロからアマまで様々な人がステージに上がります。

演奏が始まる午後8時、パイプいすが並べられた観客席は会社帰りの人や近所の人たちでいっぱいになりました。ステージといってもアーケードの一角、演奏中にも観客席とステージの間を自転車がすり抜けていくという場面を目にしました。

商店街の南側にある壁面にはジャズをテーマにしたペインティングもあります。かつて「大人のまち」をキャッチフレーズにしようという動きもありましたが、周辺に風俗店も多いことから結局はボツになったといえます。しかし、このわい雑さはジャズが似合う大人のまちの魅力でもあるのです。(坂井 信行)



商店街の特設ステージで繰り広げられるジャズライブ

### ■沖縄の風吹ちゆる街～大正区リトルオキナワ

大阪市大正区は大阪港に面しており三方を川と運河に囲まれた地域です。大正時代に沖縄で発生した大飢饉をきっかけに大勢の沖縄の人が仕事を求めて東京や大阪へやってきました。現在大正区に住む約7万5千人のうち約4分の1は沖縄出身者といわれています。

沖縄（琉球）料理の店は70件近くあり、その半数は大正区に集中しています。

JR大正駅からバスで約10分、南恩加島にある「うるま御殿」は、今帰仁村出身のマスターとその家族で切り盛りする沖縄料理の店で、毎晩2回の島唄と三線のステージがあります。



午後8時頃1回目のステージが始まり、調理場にいたマスターも着替えて三線を片手に自慢の喉を披露します。リクエストにも答え、若いお客さんからの「鳥歌」や「花」などの新しい沖縄のポップスから「今帰仁ナークニー」「怪盗ウンタマギルー」など幅広いリクエストに答えてくれます。沖縄民謡ばかりを集めたカラオケもあり、次々とお客さんが舞台に上がり、舞台でも、客席でも曲にあわせて踊りだします。

常連さんは、沖縄出身者や沖縄好きな人間で占められ、初めて行った大和の人間はそのエネルギーに臆してしまうかもしれません。

「唄を聴きにくるバカがいる」ある沖縄民謡の第1人者が客席に向かってこう言い放ったという伝説があります。唄は聴くものではない、唄い踊るものだということが、実感できます。

沖縄料理と古酒(コース)と喧騒の中で、じつくりと夜がふけていくのです。(鮎子田 稔理)



お客さんも舞台上に上がり踊り出す

### ■芸能文化を育むまちの伝統～船場夢舞台

船場は卸問屋のまち。船場の卸連盟が40年前に建てた卸連盟会館の地下が空きスペースとなっていました。ふるさと船場で雑貨の卸売業を営む林利治氏は、船場のまちの活性化のためにそのスペースを活用できないかと考えました。

「放っておいてもまちは変わっていく、どうせなら誇りのもてるふるさとにしたい。」芸能文化を育ててきた船場の風土を継承して、このスペースを芸能文化の新しい発信地にしようと自らのポケットマネーで賃借、レンタルスペースに改装し「船場夢舞台」と名付けました。船場に点在する空きスペース活用の事業モデルとしての実験の始まりです。

ここでは音楽や若手落語家のライブをはじめ、

さまざまなイベントが開催されています。「一体、こんな取り組みがビジネスのモデルとして成立するのか。」今年3月の開始以来、老朽化したビルの水漏れや音漏れの問題、ボランティアで定常的に協力してくれる人を集める苦労、業界人とのつきあい方など、多くのことがノウハウとして蓄積されてきました。

船場夢舞台の取り組みは今年いっぱいをもって一旦終了することになりますが、ここで得られたノウハウは船場のどこかできっと実を結ぶことでしょう。(坂井 信行)

### ■Blue Noteに勝った！～十三ジャズのうねり

「すごいうねりになってきましたよ。」十三本町商店街の中にある長安寺の住職、長洲眞氏は自分の立ち上げた十三ジャズという活動の反響に戸惑っているようにも見えました。

十三のまちに対して多くの人が抱く「恐い、汚い、ピンク」といったイメージを払拭したい、十三ジャズは3人のおじさん(G3と呼ばれている)の飲み屋での会話から始まりました。かつて大恐慌時代のアメリカで人々に生きる力と夢を与えたのはジャズでした。ジャズのもつ力で十三のまちを活性化したい。言い出しっぺの長洲氏はかつて淀川混声合唱団の立ち上げに関わるなど、音楽と深く関わってきた人です。

「十三のまち中に年中音楽が流れているようにしましょう。」商店街の店の中や開店前のお風呂屋さんでのライブ、病院や老人ホームへの音楽の出前、十三公園でのイベントなどなど。特定の日だけで終わるフェスティバルではなく、音楽を絶やさない取り組みがめざされています。

「Blue Noteに勝った！」8月29日のオープニングライブの日、いっぱいの観客で埋まった会場のピアガーデンで実行委員の1人が口にしました。「店の中でジャズが聴けるところは大阪でもたくさんある、しかし普段着で、質の高い生の音楽を気軽に楽しめる場所はそうない、ここに集まった人たちはこんなライブを待望していたのだ。」長洲氏はそう分析しています。店の中だけに閉じこもるのではなく、まち中に音楽を広げていく、十三ジャズの取り組みはこれから本格化します。(坂井 信行)

食い倒れのまち大阪の食文化は、大阪の歴史文化の重要なシンボルである。週刊誌等では、ステレオタイプされて、コテコテの味と言われたり、お好み焼き、たこ焼きが代表選手となる場合も多いようであるが、あまりにも一面的、皮相的である（お好み焼きもたこ焼きも大好きではあるが）。「大阪では、どのお店に入っても大きな外れはない」と、私は本気で思い込



んでいるが、そういう状況は大阪の歴史文化を語らない限り説明できない。ただし、残念なことに、「大阪の食文化」を支えてきた大阪の歴史文化が、大阪人にさえも正しく認識されていないようである。「好きやねん大阪」人間として、大阪の歴史文化の視点から「大阪の味」を論じ、その継承発展に取り組んでおられる方をご紹介したい。（森脇 宏）

### ■歴史文化のシンボルとしての大阪の食文化

「大阪の食文化」が歴史文化のシンボルであるという私論を、「大阪の食文化」の特徴や背景から述べてみることにします。

まず特徴については、3つあると思います。第一は、食べる側の特徴で、庶民の舌の厳しさであり、素直に美味しいものを求める探求力です。これは、前述の「どのお店も外れがない」状況や、昔から食べ物がよく登場した大阪の文学などが、端的に物語っています。

第二は、つくる側の特徴で、サービス精神旺盛な創造性であり、ハレの料理だけでなく、家庭的なケの料理も発展させた実利性です。

第三は、食材や調理法の特徴で、新鮮な素材を活かし、昆布出汁等を用いた「まったりとした味」（コクとウマミが口の中でゆっくり広がるような味）が特徴となっています。

次に、これらの特徴は、次の3点を背景に創り上げられてきたと思います。第一は、権威にとらわれず実質本位での自律精神、いわば大阪の商人文化です。このルーツは、古代、大陸から瀬戸内海を經由して大阪に辿りつき、以来、海運技術を駆使して通商に活躍した海人と呼ばれた人々にあると思います。この海人のしたたかさ<sup>あま</sup>は、例えば、その系譜を継いだ楠木正成が、南北朝時代に軍勢に勝る北朝軍を知略で翻弄できたところにも示されています。なお、兵庫県の尼崎のように、この海人の歴史の名残

は数多く残っています。

第二には、「天下の台所」と言われた近世・大阪の経済的発展です。豊臣秀吉による城下町と楽市楽座を契機とし、西回り航路、淀川舟運、堀川沿いの蔵屋敷等に支えられた大阪には、全国各地の物資が集まり、それ故、商品を目利きできる卸売が発展しました。前述の大阪の商人文化も、この近世の経済的発展の下で大きく発展しました。



西回り航路で活躍した北前船

第三には、魚庭<sup>なにか</sup>、菜庭<sup>なにか</sup>とも言われ、大阪湾の海産物、大阪近郊の農作物等、良質な食材が近くで確保できたことです。この海産物の流通を支えたのが、大阪で発展した鮮魚の仲買文化や、生鮮魚を扱う知恵等であり、近郊農業は、大和川の付替で出現した肥沃な農地を契機に発展しました。また、これらに支えられて、雑喉場魚市<sup>ざごぼ</sup>や天満青物市場などが形成されました。

このように、海と川に支えられた水の都・大阪の歴史的発展と、大阪の食文化は、不離一体の関係にありました。



天満青物市場（「摂津名所図会」より）

■生産者と消費者を結ぶ「浪速魚菜を守る会」

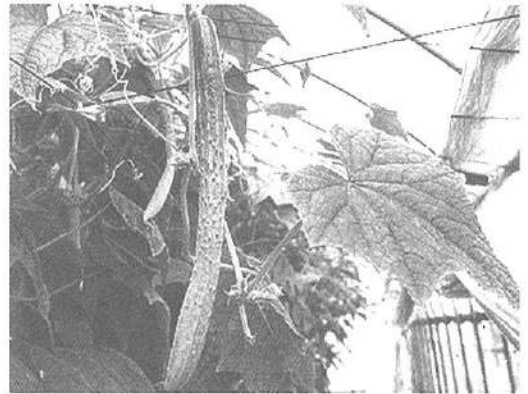
現在、大阪の食文化を発展させる取り組みが、料理人、伝統野菜の栽培者など、様々な立場から展開されていますが、今回は「浪速魚菜を守る会」をご紹介します。

この会は、良質な浪速の伝統魚菜を大阪の地に今一度復活させ、これを広く普及させることを目的に、(1)伝統野菜の契約栽培、(2)伝統野菜の宅配、(3)専門誌「浮瀬」の発行、(4)浪速魚菜を食べる会等、に取り組んでいる団体です。当初、大阪における料理人の第一人者で、天神坂上野のご主人であり、浪速料理の創造と普及に取り組んでおられる上野修三氏が、5～6人で始められた「浪速魚菜を食べよう会」が前身でしたが、参加者の増加に伴い組織的体裁を整え、一年ほど前に会員制度で正式に出発したものです。



会が発行する専門誌「浮瀬」

それでは、浪速野菜（伝統野菜）とは、どのようなものでしょうか。泉州（大阪の南部）の水茄子や玉葱は有名ですが、大阪市内にも、柿のように甘い天王寺蕪（信州野沢菜の先祖でもある）、ザクザクと歯ごたえのいい毛馬胡瓜や玉造黒門越瓜<sup>しりうり</sup>、甘みが淡く皮ごと食べられる勝間南京<sup>こつま</sup>等があり、さらに市外近郊にも、数多くの個性的な野菜がありました。ちなみに、浪速料理は、この個性的な味を損なわない料理として発展し、この調理法と一緒に普及しないと、浪速野菜の美味しさも堪能できないと言われています。



復活した毛馬胡瓜（「浮瀬NO.2」より）

現在、会員数は二百人に近づき、十数戸の農家と契約し、これまで専門誌も2号まで発行されています。また、「浪速魚菜を食べよう会」の参加者は、百人近くまで増え、最近では会場の確保に悩んでおられるようです。

会の代表の笹井良隆氏によると、今の会員制度ではビジネスにならないため、調理法も普及できる対面販売の小売業者と協力関係を結び、流通業として成立させることも目指しておられるようです。

まちづくりに関わる者として、浪速魚菜の生産者と消費者が出会えるまちづくり、農漁住共存のまちづくり、浪速料理のお店と雰囲気がマッチするまちづくりなどを応援したいと感じる今日この頃です。（森脇 宏）

戦前戦後の大阪の発展には夢の「大陸」への貪欲な交易と拡大が背景にあったといわれる。敗戦後も「大陸」からの引き揚げのなか、この異文化の「もの」「かね」「ひと」「こと」の「触発」が残したパワーは復興の牽引力となり、高度経済



成長を成し遂げた。その後、一層の国際感覚や独自性を求められながら、大阪はアンチ東京と大阪の個性への慢心が、音痴で遅れた大阪を自作したといえないか。次の「触発」の小さな芽を大きく育てたい。(馬場 正哲)

### ■触感への渴望

人はひとりでは暮らせなく、他者に感知されるなどの触れあいをもとめて、さまようものと思われま。私の時代は「追いつけ追い越せ」の一直線の時代で、目標への効率と量の確保が優先で単純でしたが、今日のような目標の曼陀羅な時代は行き先不明で、関係性を求めた、さまよい行動が重要なようになります。

例えば、下町の触れあいのあるまちとして知られる浅草。浅草寺の賑わいはNHK「こころ」のブームだけでなく、東京の個性的な観光スポットとして当然でしょうが、その中で小さな遊園地「花屋敷」の老若男女の賑わいは、全国的な遊園地不振の中、どこか人々の、時代や世代や男女を越えた「触感」への渴望を予感させました。

### 触発のまち「新世界」の再生

東京の浅草に対して、大阪の触発型の街として「新世界」が挙げられます。四天王寺に隣接して、明治36年に開催された第5回内国勧業博覧会会場として産声を上げ、一大歓楽地として栄えましたが、バブル後は、夜の10時以降人通りが途絶えた時期がありました。丁度、海底に沈んだ古代都市をモチーフにしたアミューズメントスポット「フェスティバルゲート」がオープンした頃です。



串カツ屋台に並ぶ若者

ところが、このところ、かつての賑わいを取り戻しつつあります。しかも若い男女やサラリーマン、外人さん、観光客などの他に地元住民や浮浪生活者など、多様な触れあいのまちが実現してきています。

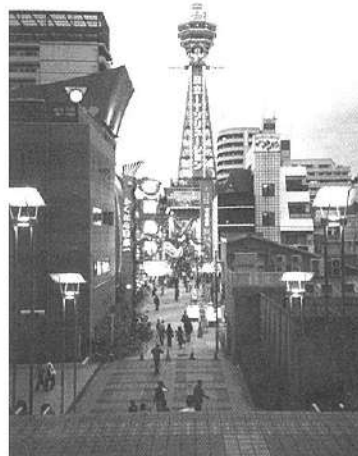
これは、「Meets」や「Hanako」などのタウン誌に街やお店が紹介されることにもよりますが、あの恐ろしげなジャンジャン横丁の串カツ屋さんには若者が行列をなしているのには仰天します。

この新たな「触」の出現は、「人」の変化とともに、新世界の質的転換をも促しています。個性的でおもしろい「触発」の街の再生が期待されます。

### フェスティバルゲートの触媒的脱皮

新世界の南西に隣接するフェスティバルゲートは、1997年にオープンしたビルの中に遊園地、映画館、飲食店、ショップなどを集合させたユニークな総合アミューズメント施設でした。

オープン当初は飲食施設30以上、ショップ約40を数えていたのですが、現在ではわずかショップ11、飲食店9と激減しています。行っ



近代化もある新世界

てみると、かつての賑わいが無い！「このビル全体がホラー系のアトラクションか？」と揶揄されています。

しかし、よく見ると、ビーズの「KIWAスワロ館」や常設「大阪プロレス：デルフィンアリーナ」などのマニアックな人々やジェットコースターの歓声などで間欠的に賑わいをみせます。

また、空きスペースを活用した、『新世界アーツパーク事業』が展開・開店されています。この事業は各ジャンルの専門家がNPOを設立し、公演・ワークショップ・文化交流など、多様でレベルの高い事業を継続的に展開するとともに、『大阪現代芸術祭』の一環として、大阪市主催による特定のプロジェクトを計画的に推進し、行政と民間が協力して先端的な芸術拠点づくりに取り組むとのことでした。

これに参加され「詩のカフェルーム・cocoroom」を主宰する詩人の上田假奈代さんは、現代文学と新世界周辺の系譜から、時代ごとの感動や悲哀の繰り返しの妙が新世界にあると語られていました。

したたかに、適正規模で、フェスティバルゲートは生き続け、新たな「触れあい」を発信しながら、まちとしての馴染みに向けた脱皮を繰り返しています。

#### まちづくりに「触」を育てる

目標の曼陀羅化や人口の定着・少子高齢・減少の時代を迎え、大阪のイノベーションは、このような小さな「触」から新たな「発憤」を呼び起こすことから始めることが効果的なようです。（馬場 正哲）

#### ■盛者必衰のことわりー日本橋でんでんタウン

もう20年ほど前、パソコン少年だった小学生の私は、月に1度は用事もないのに日本橋の電気屋街に通っていました。

当時はパソコンが一般に出回りだした頃でしたが、一式揃えると20万円を越える価格のため、学生などの金を持たない連中にとっては、電気屋の店頭にあるパソコンを使うのが普通でした。

日本初のパソコン雑誌「I/O（アイオー）」に掲載されていた、当時の読者投稿欄「日本橋マップ」を読むと、「xx無線ではPC8001とMZ80K



日本橋の転身を象徴するガチャガチャ専門店

が使用可能」といった文章が掲載されています。店頭で勉強しながら苦勞して金をため、パソコンを買って店に恩返しをするという古色蒼然としたビルディングスロマンが、日本橋を舞台に繰り広げられていたのです。私自身も、自作の回路図を店員に見せ、相談に乗ってもらった経験があります。店にとって、それは次世代の顧客を作る営みであったと言えるでしょう。

しかし、何事にも寿命があります。成長期を過ぎた店は、固定費を減らすため、表通りから裏通りへと場所を移し、代わりに、裏通りで産声をあげた店が、表通りに進出します。それは昔から続く、盛者必衰のことわりなのです。アマチュア無線や高級オーディオの店は、今、その多くが裏通りにあります。82年の「日本橋マップ」にある43店のうち、今も同じ場所で営業しているのはたった15店でした。

今、日本橋ではパソコンショップまでが裏通りに移り、表通りにはビデオソフトやゲーム、模型、同人誌、スポーツ用品など雑多な種類の店舗が増えてきました。フィギュアやガチャガチャの店も人気で、どうやら日本橋そのものが電気街からの脱却を図っているように見えます。

私にとって日本橋は電気のまちなのですが、歴史をひもとくと日本橋は電気のまちではなく、商人のまちであると言えるようです。明治時代は古着・古書店街であったものが、昭和初期にはラジオや蓄音機店街になり、現在は電気店街になっています。時代のニーズと共に新陳代謝を続けるのが日本橋のならば、現在の変化も当然の流れかもしれません。（長澤 弘樹）

新しい動きは「際」(キワ)から生まれる。大阪を探索すると、空間的には商業地と住宅地の街「際」や街と川、陸と海等の水「際」、機能的には大学と企業、社会人と大学生等の学「際」、趣味とアーティスト、ボランティアとNPO、SOHOとベンチャービジネス等の業「際」、外国人と大阪人等の国「際」等、新しい文化、ビ



ジネス、発見等は本通り(メインストリート)ではなく、際・境界(ニッチ)から生まれてくるのが感じられる。

そのような「際」で、特に、地域と若い感性とを結ぶ「アート」を媒介とした「心(ソウル)」を結ぶ緩やかな新しいテーマ型プラットフォームづくりが様々な地域で始まっている。(中塚 一)

### ■中崎町・アートによる長屋・人再生

梅田から東に歩き、新御堂筋を渡ると、震災を免れた長屋が密集する地区、中崎町があります。都心と近接しているのに別世界に迷い込んでしまったような、周辺とは違う独特の雰囲気です。

2年前、築百年以上経つ長屋の改装をパフォーマンスとして公開することからスタートした「Salon de AMANTO」は、今では地元の人のみならず、近くに居を構える若いアーティスト、噂を聞いてやってくる多種多様な人々の拠り所となっています。「当初思い描いていたイメージ通りになってきたが、ここで生まれていくアートが本当にビジネスとして成立できるのがこれからの課題だ」とオーナーであるパフォーマンスのJUNさんは語ってくれました。

こうした動きはまちのあちこちで生まれており、古い長屋を借りてショップを始める人も出てきています。卒業制作で中崎町の長屋を再生

させ、そのまま「Rcafe」のオーナーとして営業している藤井さんもその一人。「古き良きものを見つめ直す」というコンセプトから始めたこのカフェは、今では地元の人々の隠れ家的スペースとして愛されています。

アートなどに取り組む若者たちに接すると、自分の思い描いている夢や、取り組んでいる試みを熱く語ってくれます。彼らはこうした場所で自らの生き方を支え、応援してくれる人に出会い、自信を得て、新たな価値観を見いだすのでしょうか。

ハード面での「長屋再生」はテレビや雑誌で紹介されていますが、中崎町はそうした表層的なものにとどまらず、生き方に悩む若者たちが、古い長屋やまちの雰囲気に惹かれるうちに、昔からそこに息づいていたコミュニティや価値観に触発され、住まい、人々との交流を通して自らを「再生」する場所として注目されています。(絹原 一寛)



古い家を改装した美容室

■上町台地:緩やかな地域におけるテーマ型コミュニティの連携

上町台地は、古から様々な人々の営みや暮らしが重なりあっており大阪市内でも歴史と文化の香りが最も感じられる地域です。そのような上町台地では、既に皆様もご承知のように「学び・癒し・楽しみ」をテーマとした現代のカオス寺小屋「應典院」の秋田住職、空堀商店街界隈の長屋再生プロジェクトを手がけられている六波羅さん、ミニコミ誌から登場し上町台地の魅力を若者の視点で情報発信しつづけておられる小田切さん、コリアタウンの持つ民族文化を紹介しながら修学旅行等の全国各地からの受け入れておられる宋さん、トップバッターとして常に時代と地域をリードされてきた一心寺シアター、下寺町一帯の寺を開放したなにわ人形芝居フェスティバルなどの仕掛け人高口住職等、様々な地域でバラエティ豊かな活動が展開されています。

これらの様々な活動主体が緩やかにネットワークしながら、「だれもが豊かな人生を、暮らしを謳歌できるまちづくり」を考える場として、今年5月に「上町台地からまちを考える会」が立ち上がりました。都会における地域型とテーマ型とが絶妙にブレンドされた「テーマ型地域コミュニティ」とでも呼べる新しい人と人



空堀周辺のC1拠点「練(れん)」



下寺町周辺のC1拠点「應典院」(出典:パンフレット)との交流の場に、既に様々な人々が吸い寄せられています。

今の活動の第1弾として、「この秋、アートな上町台地をまち歩き。人をつなぐ、地域をつなぐ。新しいまちの魅力、発見。」をテーマに、今年の10月~11月にかけて上町台地アートマンスリーが開催されます(詳細は、<http://www.geocities.jp/uemachidaichi/>)。

長い歴史の上に培われてきた上町台地では、最近の都心居住の謳い文句である高層マンションやオシャレなカフェだけでなく、じっくり、ゆっくりそこで暮らす人々や訪れる人々が人生を楽しむことができるまちづくりに向けて、いい(サジ)加減で、地域の人々を巻き込んで展開されてきています。正にPI(パブリック・インボルブメント)でなく、CI(コミュニティ・インボルブメント)と呼べる活動です。

「資源力」「コミュニティ力」「市民力」の3つの力をともに育成しながら、都心で暮らす「つながりのデザイン」づくりを提案する上町台地の活動から目が離せません。ちなみに、私も上町台地の住人として楽しませていただいております。(中塚 一)

## 道頓堀があつい

【大阪事務所／堀口 浩司】

あついといってもヒートアイランド現象ではありません。道頓堀は阪神タイガースのリーグ優勝と共に全国的にダイビングの名所になってしまいました。テレビで見て気づかれた方もいらっしゃると思いますが、道頓堀の戎橋から上流側の遊歩道整備が進んでいます。国の都市再生プロジェクトに指定され、水都再生の一環として道頓堀川の遊歩道と橋梁整備が進んでいます。

この水辺の整備に対して、都市環境デザイン会議（JUDI）関西ブロックの有志メンバーが、道頓堀水辺整備への提案を行いました。JUDI関西ブロックには土木、建築、都市、ランドスケープなどいろんな分野の人材が参加されています。この組織の特徴を活かし、異分野のメンバーによる協働作業により遊歩道と橋の提案をまとめ、大阪市に提案しました。

参加メンバーは一筋縄では行かない老練なデザイナーやプランナーが10数人。いずれの方も豊かな業務経験と強烈なプロ意識、そして道頓堀に対する熱い思いをお持ちですから、簡単に結論がでる筈もなく、過去の計画の再評価やデザイン条件の見直しに邁り、「最善案はなにか」に向けて、白熱した意見交換が続きました。それぞれ多忙な方ですから、集まるのは休日や夕方以降です。更にメールリストを使った情報伝達、意見交換も効果を発揮しました。私自身も異なる分野の人の仕事の進め方に学ぶこ



会議の様子す

とも多く、大いに緊張感を楽しむことができました。

プロ同士のコラボレーションの方法として、最初は自分の見識で個別提案するコンペ方式、そしてそれぞれの提案を相互評価してから、ワークショップスタイルで共同作業をする方法をとりました。メンバーの中でデザインの判断が分かれ決断を要する場合、最終判断はデザイン委員長（G K設計の森重氏）に任せることにしました。結果的に見ると、最終判断に至る前に議論の蓄積を進めたこと、過去のJUDI関西の活動の中でメンバー間のコミュニケーションが確立していたことなどの条件が幸いし、決定的な意見の対立によってチームが分裂することもなく検討を進めることができました。

昨年の秋からスタートし約1年近く経ち、我々の提案を反映した計画案に沿って工事が進んでおり、来年の秋には部分的に竣工します。

相当なエネルギーを投入したJUDI道頓堀プロジェクトの成果が気になる方は10月25日（土）のJUDI関西のフォーラム会場に足をお運び下さい。我々の提案のパネルや模型の展示を行うと共に、提案概要の冊子も入手することができます。

日 時：10月25日（土） 9:30～17:00

会 場：アクセスホール

大阪市中央区道修町 3-5-11

主 催：都市環境デザイン会議関西ブロック

URL：<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/forum/forum12/index.htm>

第12回都市環境デザインフォーラム・関西

都市環境デザインの  
**ファッションモード**  
Fashion Mode

2003.10.25 (Sat) 9:30～17:00  
会場：アクセスホール  
主 催：都市環境デザイン会議関西ブロック  
URL：<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/forum/forum12/index.htm>



## 社会人大学院の創設は、都市再生の決定打となりうるか

〔大阪事務所／杉原 五郎〕

### 大阪市大創造都市研究科でワークショップ

「どんな受講生がきているのだろうか」

7月4日(金)の夕方6時半から、大阪駅前第二ビル6Fで大阪市立大学社会人大学院(創造都市研究科)のワークショップ講師を務めた。今回は、相手が社会人ということで、やや緊張した。

テーマは、「京阪神圏の都市再生一衰退の危機に直面する関西の生き残る道一」。受講生は、40代～50代を中心に20数名。真剣な眼差しをひしひしと感じながら、パワーポイントによるプレゼンテーションを約60分。阪大や関大で現役の大学院生に話すのとはちょっと勝手が違ったが、なかなかの手応えであった。

休憩を10分ほどとって約70分のディスカッション。受講生から次々と鋭い質問が飛んできた。「関西では、アジアとの関係を含めて多文化共生を追求すべきではないか」「コミュニティの再生には、ローカルイニシアティブが大切であると思うが」等々

ここまで終えたところで、すでに9時を過ぎていた。私は、教室を離れて佐々木雅幸先生とともに地下の居酒屋に移動したが、残った受講生は、受講生相互による仕上げの議論を続けた。

10時近くになって、何人かの受講生が居酒屋に合流し、再びディスカッションの延長。ビールを飲み、食べながらの議論を延々と続け、家に帰り着いたら、日付が変わっていた。

### 大阪市大社会人大学院の特徴

大阪市大の社会人大学院・創造都市研究科は、今春4月に開校した。研究科長は塩澤由典先生(前経済学部教授、関西ベンチャー学会会長)、都市政策専攻の主任教授は「創造都市論への挑戦」の著者で立命館大学からスカウトされた佐々木雅幸教授。「都市ビジネス」「都市政策」「都市情報学」の3つの専攻からなり、160

名ほどが第一期生として入学しているとのこと。

この社会人大学院の特徴は、第一に、「ワークショップ」と「フィールドスタディ」にある。「ワークショップ」では、外部から招いたゲストスピーカーの講義(50分)、外部講師と受講生とのディスカッション(50分)、受講生相互の討論(50分)が1セットで、社会の事象をケーススタディ的に学び、議論するというもの。「フィールドスタディ」では、例えばホームレスの実態をNPOなどへのヒアリングによって現場体験をまとめることになっている。

第二に、受講生が多彩であること。私が担当した7月のワークショップには、大阪市、神戸市、堺市といった自治体の職員、市長経験者や市会議員、新聞社の編集委員やテレビなどマスコミ関係、産学連携に取り組んでいるリサーチパークの関係者、シンクタンク・NPO・市民団体の関係者など、社会の第一線で頑張っている人々が受講していた。

第三に、受講生が現役社会人としての鋭い問題意識を持ち、講義や討論などに積極的に関わっていること。佐々木先生の話によると、受講生はそれぞれ実務に裏打ちされた深い問題意識を持ち、講義や討論などを通じてそれぞれ問題意識を高めるにとどまらず、自主的な研究会活動を活発に展開しているようだ。

## 社会人大学院の創設は、都市再生の決定打となりうるか

少子高齢化による学生数の減少、国立大学の独立行政法人化、知的クラスターや21世紀COEプログラムによる競争的研究資金の重点配分など、大学を取り巻く状況は一変しつつある。大阪の都心では、市大だけでなく、府大、神大、立命、関学、阪大など、社会人大学院の創設がちよっとしたブームになっている。元気で知的好奇心に溢れた「創造的市民」の登場は、絶対的衰退の危機に直面する関西にとって、都市再生の決定打になりうるのだろうか。大きな期待を持って見守っていききたい。

## 青垣町で魅力的なスローライフの実践

〔大阪事務所／森岡 武〕

### 兵庫県氷上郡青垣町東芦田

兵庫県丹波地域の奥座敷、加古川源流のまち、青垣町では、多様な農村環境・田園風景を背景に、都市・農村交流が盛んです。

多自然居住、加古川源流・森林ボランティア、農作業体験、最近では、おやじの隠れ家づくり、棚田オーナー、と交流メニューも多彩で、交流人口は増加の一途です。

中でも極めつけは、町の東玄関口にあたる東芦田集落で、都市農村交流のパイオニアとして村おこしグループ「ごりんかん」がすごい。平成2年に有志40名が各30万円を拠出、計1,200万円を軍資金に村おこしを推進。自腹を切ってログハウスを建設するほど。この施設を核に、米、ぶどう・ももの農業体験や豆腐づくりなどの農村体験を提供している。都市の人たちの活動組織「丹波自然塾」が今年で農村交流10年の節目を迎えます。

### 7人の輩

この東芦田集落に、心に秘めた夢に向かって歩みを止めようとしぬ輩が7人。

事の発端は、7人衆の高齢化に伴い、請負農地の世話が難しくなってきたこと。持ち主と相談の上、昔ながらの湿原に戻し、睡蓮一杯の親水公園をつくり、集落の活性化に役立てたいという壮大な夢の共有です。

この7人衆、元来、技術力を兼ね備えた行動派だけに、こうと思うと動きは早い。事例視察は当たり前。資材調達、水生植物の入手もお手の物で、現地に来て欲しいと誘われた時には、既に基礎造成が終わっていました。



親水公園（江古花園）づくり現場うち合わせ

### 1日だけの農村レストラン・・・開店

親水公園づくりも一区切り終えたお盆休みの吉日、8月12日（火）に、この取組は実現しました。

「東芦田でしか出来ない公園づくりをしませんか？」という呼びかけに7人衆が即反応。内容は、「東芦田の活性化について、食事をしながら夢を語りましょう！」というもの。地元出身の兵庫県立人と自然の博物館・足立勲先生と、地域食材の付加価値を高める料理を提供できる場を求めて生きたいという京都の料理人・仲正人氏を招き、1日だけの農村レストランが開店しました。

### スローライフの本質は、実行・実践！

里山や湿原、氷上回廊といった東芦田特有の環境に関する講演・講評のあと、地元の獣害駆除でとれたシカ肉を使った「シカ肉のポワレ・ワサビ風味のマデラソース」、地元産のナスやトマトを使った「ラタトゥイユ」など、五種の料理を堪能しました。

講演にメモを取り、ともに親水公園の図面を描き、シカ肉の変貌ぶりに感嘆の声をあげた参加者一同からは、「園芸種だけでなく、地域固有種も考えよう！」、「地域活性化につながる環境保全を考えよう！」、「せっかくならちょっと儲けましょう！」、「積極的に地元に必要な人材を呼んでこよう！まずは、料理人かな？」などなど。

「ゆったり」、「のんびり」したスローな時間の流れの中に、「あれがやりたい」、「これもやりたい」といったワクワク、ドキドキする熱い空気が沸き上がってくる。スローライフの本質は、実行・実践にありと実感した夜でした。



農村レストラン（シカ肉料理）

## 我が家が太陽光発電所になりました

〔大阪事務所／福岡 雅子〕

昨秋、自宅の屋根に太陽光パネルを設置しました。幸い南面がやや大きいものの、寄せ棟屋根だったため、東西南の3面利用で3.37kwのかわいい発電システムです。

設置にあたり、財団法人新エネルギー財団をつうじて、国の補助金をいただきました。2003年度は1kwあたり9万円に下がってしまいましたが、2002年度は1万円多い10万円の補助がありました。もちろん、自己負担の方がはるかに大きく、30年以上運転してようやく元が取れるかどうかというものです。でも、「今どき、貯蓄型生命保険でも元本は保証されないし、地球環境の保険と思えば安いかも」「高くても外車に乗りたい人がいるように、太陽光パネルが付いた家に住みたい人がいてもいい」と妙な納得をして割り切りました。

家が制限の厳しい風致地区にあったため、市の都市計画課から瓦屋根でないとダメという話が出ましたが、落ち着いた色の単結晶型パネルにするということで、許可いただきました。環境配慮の取り組みは理解できるが、景観も守らねばならず、悩ましいところと、行政担当者から苦しい胸中をうかがいました。しかし、私は、飛鳥時代や奈良時代に宮城や寺院が建立された時には、瓦屋根自体が珍しく、今の太陽光パネルにも劣らないほど景観に違和感をもたらす物であったかも知れないと考えています。瓦屋根を普及させた先人に学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

工事は比較的経験のある電気工事会社にお願いしましたが、寄せ棟タイプのパネルの施工は



発電量は室内のモニターで確認できます



1面完成しました

初めてということで、かなり長時間屋根の上で格闘されていました。電気技術者の方々は太陽光パネルの仕事始める前は屋根面で作業することがほとんどなく、最初の物件の時は、高所がとても怖かったそうです。

ところで、2003年4月1日に、電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法（RPS法）が施行されました。これは、電気事業者（電力会社等）に対して、新エネルギー等によって発電される電気を一定量以上利用することを義務付けることにより、新エネルギー等の利用を推進する法律です。太陽光は、当然、RPS法の対象となる新エネルギーです。そこで、我が家の設備について、経済産業省に申請し、RPS法で認められた新エネルギー等発電設備としての認定を受けました。ちなみに、登録設備名は「寧楽太陽光発電所」です。

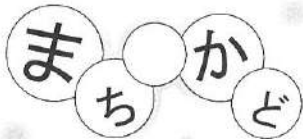
1年のうちで最も発電量が多い5月の月間発電量は311kwh、そのうち23kwhを自宅で使い、288kwhを関西電力に売電しました。売却益は約7千円です。ただし、発電できない雨天時や夜間に使う電気は、買っています。以前に比べて、かなり節電を心がけるようになりました。

皆さんも、自然エネルギーを有効に使って二酸化炭素の排出を抑制し、地球温暖化対策を始めませんか？

太陽光発電助成制度、RPS法については、下記のホームページをご参照ください。

○太陽光発電助成制度：<http://www.solar.nef.or.jp/josei/josei.htm>

○RPS法：<http://www.rps.go.jp/>



# 「阪神優勝」という名の「まつり」と「いつもの生活」

〔株〕バード・デザインハウス／鳥山 大樹

なにを隠そう、隠すことは何もないのですが「私は阪神タイガースファンです」と、言う方が急に増えた大阪の街ですが、あの戎橋の道頓堀川ダイブの有り様などを見ると、心ある「真の阪神」ファンと自認している人は静かに目を閉じるのであります。



話はさて置き、星野監督と日産のカルロスゴーン氏との経営手腕比較や優勝による経済効果が各種論じられ、また、違った活況を呈しているのも、みなさんご存知のことと思います。阪神優勝の経済効果は、1985年は、400億円、科学万博などの国家行事と肩を並べる効果があり、関西の経済成長率は、約0.1%引き上げられると発表された記事と、今回の優勝は関西で1,133億や1,587億円、全国で4,124億円との記事が手元に有ります。



しかし、実際はどんなもんなんでしょうか？試算のようにいけばいいのですが、気運をあおる7回裏や勝ったときにあげるジェット風船のようなものと関西人は分かっていて、あえて話

題にしている節がナイでもありませんが…。

一方、ヒーローインタビュー受ける時、阪神の選手は異口同音にファンを中心とした「甲子園の力」を熱っぽく語ります。「グラウンドにゼニが落ちている」と、今は亡き、南海ホークスの鶴岡監督が選手に言った至言がありますが、甲子園は、まさに「ゼニは、スタンドに落ちている」状態であります。さて、大阪には球場に入れない人たちがたむろする居酒屋が結構ありますが、本場アメリカには、「スポーツバー」という形態の店がスポーツ専門の放送局と共に数を増やし発展し、最近では、おいしい料理・ビールは勿論、家族連れでも気軽に立ち寄れる雰囲気の良い店が好まれていると、聞きます。



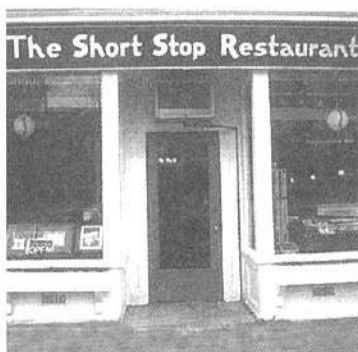
それはそうとして、偶然にも奇跡のような、プラチナチケットを手に入れ、その瞬間に立ち会い、隣に座った見ず知らずのカワイイ娘さんと思わず抱き合えたことは、「日頃の行い」の賜と感謝し、男子一生の思い出に成ると確信しています（次はいつやって来るのかな?）。※バード・デザインハウスは、アルパックのグラフィックデザインのパートナー事務所です。



静かに優勝をかみしめる阪神ファン  
(大阪・阪神梅田駅改札)



ちゃんと帰れたかなと思ってしまう  
(大阪・道頓堀)



野球用語を店名にしたレストラン  
(ニューヨーク/クーパースタウン)

## アルパック (株) 地域計画建築研究所

- 本社 URL: <http://www.arpak.co.jp> E-mail: [info@arpak.co.jp](mailto:info@arpak.co.jp)
- 京都事務所 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
- 名古屋事務所 〒460-0003名古屋市中区錦1-19-24・名古屋第一ビル8F/TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
- 東京事務所 〒186-0001東京都国立市北1-1-17・田畑ビル 3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130
- 九州事務所 (株)よかネット 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673